

奈良県立万葉文化館蔵

『日本書紀』解題

吉原 啓

【書誌情報】

(貴重書番号：口41)

〔体裁〕 版本、袋綴、五つ目綴、三〇卷一五冊

〔表紙〕 紺表紙、題簽「日本書紀」

〔料紙〕 楮紙

〔行数〕 八行一八字詰

〔寸法〕 縦二七・五cm、横一九・四cm

〔刊年〕 無刊記

〔蔵書印〕 題簽…「田近」。表紙見返し…「昭和八年十一月廿五日／黒田亮文庫／於岐阜求之」。冊首…a「神楽園」、

b「静聴館／蔵書記」、c「年月日／黒田亮

文庫／之」、d「山崎／氏印」、e「本田／蔵書」。

冊尾…「貴／栄」(黒印。最終第一五冊のみ欠)

〔摘要〕 卷二九の四二丁落丁

【解説】

『日本書紀』全巻の刊行は慶長一五年(一六一〇)の古活字版で、

その後、寛永年間(一六二四～一六四三)頃に慶長版を一部訂正し、訓点・返り点を付した覆刻製版本(寛永頃版本)が刊行されたとい^①う。その後刷本が、広く流布した寛文九年(一六六九)版とされる。

本資料には刊記がなく、慶長一五年の野子三白の跋のみで終わる。小倉慈司氏は、寛文九年の刊記がない無刊記本は、基本的に寛永頃版本とみて良いという。また、寛永頃版本でも国立公文書館蔵の岩垣菊苗本と元政本では違いがあり、岩垣菊苗本は慶長四年の清原国賢跋を巻二に置き、元政本は巻三〇最末尾に置く。さらに、岩垣菊苗本の誤字を元政本が正しており、元政本の方が新しいとする^②。

本資料は、清原国賢跋が巻三〇の最末尾にあり、小倉氏が述べる文字の異同も元政本と同じであるが、元政本にはない訓点や返り点があることが疑問である。しかし、同じく寛永頃版本とされる赤塚芸庵手校本(大和文華館蔵)にも元政本にはない訓点・返り点があり、しかも字形や位置が本資料と異なる。ともに書き入れであろうか。

また、寛文九年版本も第一種本と第二種本に分類され、第二種本は第一種本とは字形が異なり、返り点も多く付されることから、第二種本が新版本によるものとされる^③。本資料の字形は寛永頃版本や第一種本と同じであり、返り点も第二種本とは字形等が異なる。

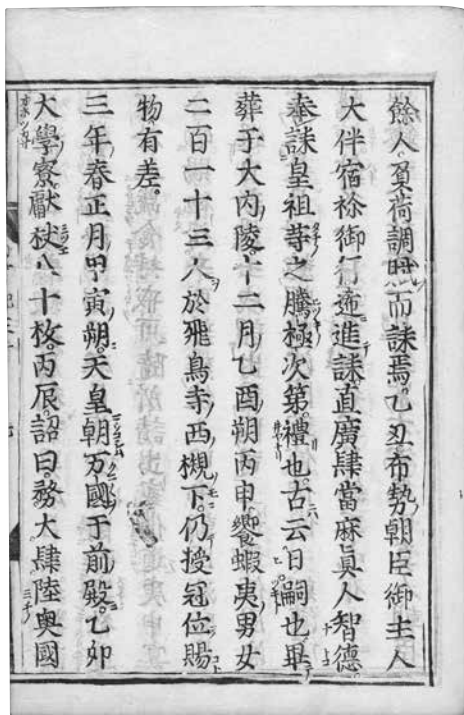
以上のことから、本資料については、寛永頃版本と同様の特徴を有するが、訓点・返り点に疑問を残すことを指摘するに留める。

見返しの蔵書印からは、本資料を黒田亮が昭和八年一月二五日

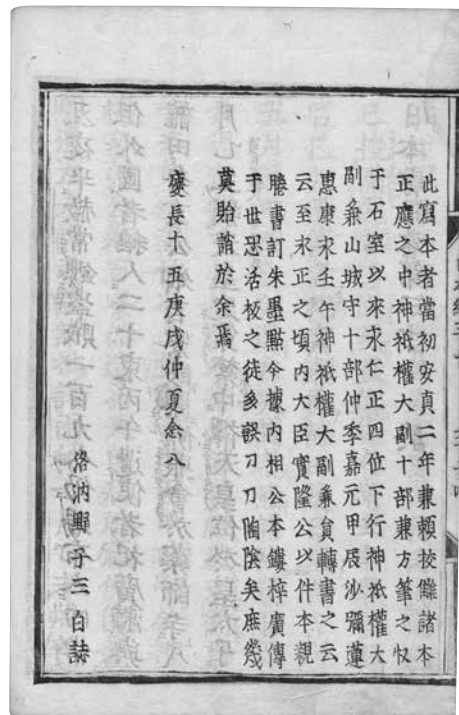
に岐阜で入手したことがわかる。黒田亮は、明治二三年生まれの心
理学者で、昭和二二年に岐阜県で亡くなっている⁽⁴⁾。また、いくつか
の冊の裏表紙見返しに「岐阜市／大衆書房」のシールが貼付してある。
巻一六の裏表紙見返しには、「従初卷至十六卷／書紀集解本校合
天保六年乙未正月書入（花押）」とあり、巻一六までは天保六年（一
八三五）正月までに書き入れが行われたようである。
巻二九・四二丁の落丁により欠損している本文は、天武一四年五
月甲子条の冒頭「甲子」の後から、同年九月壬子条「天皇宴于旧安
殿之庭」のうち「天皇宴于」までである。また、巻一五の一丁は、
蔵書印がc d e だけであり、二丁才にa b が押される。落丁してい
た一丁を後に追補したものと恐れ、一丁のみ料紙・版式とも異なる。

註

- ① 『日本書紀撰進千二百年紀年会編』『日本書紀古本集影』一九二〇年。
- ② 小倉慈司「古活字本・版本『日本書紀』をめぐって」（新川登亀男・
早川万年編『史料としての『日本書紀』 勉誠出版）二〇一一年。
- ③ 中村啓信氏（寛文九年版『日本書紀』）（古事記学会創立五十周年記
念実行委員会編『古事記学会創立五十周年記念展示書目解題』二〇
〇三年。
- ④ 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』ティービーエス・ブリタ
ニカ、二〇一四年。



『日本書紀』 奈良県立万葉文化館所蔵
卷三〇 七丁才
二行目の「誅」は第二種本では「誅」になる。



『日本書紀』 奈良県立万葉文化館所蔵
卷三〇 野子三白跋
四書肆の刊記がない。